

愛魂～らぶたま～

うみのすけ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

侍の国。僕らの国がそう呼ばれたのは、今は昔の話…。 20年前、突如宇宙から舞い降りた天人（あまんと）の台頭と廃刀令により、侍は衰退の一途を辿っていた。

万事屋、坂田銀時。

江戸のかぶき町に店を構え、頼んだらどんな仕事でも引き受ける何でも屋。

その万事屋に、3人の女子高生が現れる。それは、江戸でも有名なスクールアイドルμ'sのメンバーだった。

銀魂のキャラとラブライブキャラが入り乱れるドタバタ痛快SFアクションスポーツコン時代劇…のつもりです。

昔、アメブロに書いてた作品です。途中まで書いていて消してしまったのですが、うろ覚えで完成目指したいと思います。

無理矢理な設定、無茶苦茶な話などは『銀魂らしさ』と思つて目をつぶつていただけたらこれ幸いです。

目

次

出会いと始まり

天然パーマに悪いアイドルはいない

外見だけで人を判断しちゃダメ

見た目より大事なのは中身

見た目よりも中身といつても限度がある

何事もノリとタイミング

長所と短所は紙一重

夏休みは始まる前が一番楽しい

人生はベルトコンベアのように流れる

導かれしバカたち

んまい棒は意外とお腹いっぱいになる

昨日の敵は今日もなんやかんやで敵

出会いと始まり

天然。パーマに悪いアイドルはいない

神楽「銀ちゃんお腹すいたアル」

銀時「……」

神楽「お腹ペコペコネ。もう3日も何も食べてないとか育ち盛りの乙女にどんな生活させてるアルか?」

銀時「……」

神楽「ねえ銀ちゃんてば!」

銀時「……」

神楽「フライドチキンの皮よこせよ!」

銀時「だああああ!うるせえんだよ!お前の大聲が腹に響いて腹の虫がBダツシユしてクリボーと巻き込み事故起こしそうなんだよ!」

神楽「だつて腹ペコよ…定春もかわいそうに動く気力もないネ。」

定春「くうくん…」

銀時「…お前、定春のぶんのエサも食つてただろ。そもそもこうなつたのは誰のせいだ?育ち盛りの乙女が向こう一週間分の米ぜーんぶ食つちまつたからだろうが!…どうすんだよ…仕事も来ねえし…」

ピンポーン

神楽「きつとお客様ね!…これで食料にありつけるアル!」

銀時「いや、待て神楽。そう簡単に仕事が舞い込むなんてお前いまだき昼ドラでもそうあるわけねえ…つまりババアだ。家賃の集金に来たに違ひねえ。」

ピンポンピンポン

銀時「ほら見てみろ。しつこく鳴らし始めたぞ。黙つてジッとやり過ごすんだ…わかつたな？」

過ごすんだ。わかったな?」

神樂
一わかつたネ。
定春もシーツよ？」

ピンポンピンポン

銀時・神樂「……」

ピンポンピンポンピンポン

神楽「ねえ銀ちゃん、今日はやらしつこくないアルか?」

「まあ、今月は滞納してるからな。
死ぬなんかしないよ。」
ないとわかりやそのうち帰るだろう。」

ピンポンピンポンピンポンピンポン

銀時・神樂

ピンポンピンボーン

銀時・神樂

銀時「だあああああ！うるせえええ！わーつたよ！出りやいいんだろ！出りや！……つたく」

ガラララララ…

銀時「わりいバアさん…ウチは今深刻な食糧難で今日食うメシにも困つて家賃なんざ当分払えね…」

穂乃果「あの…ここつて万事屋さんですか？」

見るとそこには制服を着た3人の女子高生が立っていた。

銀時「ああそりゃ…何？私たちの弱小野球部が全国大会に行きました的なカンパならウチはビタ一文出せねえぞ？」

こどり「ねえ…穂乃果ちゃん、大丈夫なの？」

海未「見るからに怪しい風貌ですしどんなかやる気がなさそうですし…目が死んだ魚のようですし…なにより天然パーマ…」

銀時「あの…ひそひそ話はもう少し小さくしゃべるもんだろ？全部聞こえてるんですけど？何サラッと見たままの特徴初対面の人に向かって言っちゃってんの？しかも天然パーマは関係ないよね？」

穂乃果「大丈夫だよ！希ちゃんが前に言つてたもん。困つたときはかぶき町の万事屋になんでもお願ひするのが一番だつて！」

銀時「…仕事の依頼か？言つておくが、ウチは慈善事業じやねえから金払わねえと仕事は請けられねえぜ？見るからに女子高生だが：金はあるのか？」

穂乃果「はい！大丈夫です！ウチの部には大病院の娘の真姫ちゃんっていうお金持ちがいますから！」

こどり「…穂乃果ちゃん？」

海未「…また真姫頼みですか。」

ドタドタドタ…

神楽「銀ちゃーん。どうしたネ？バアさん勢い余つて殺してしまつたアルか？…ああつ！」

銀時「…どうした神楽？」

神楽「μ，sアル！知らないアルか？今、江戸でも人気急上昇中のスクールアイドルね！」

穂乃果「穂乃果たちも有名になつたんだねえ…嬉しいねえ海未ちゃん」

ん！」

海未「…私はできれば目立つことなくひつそりと暮らしてみたいのですが。でも、 μ , sをいろんな方が見て知つていただいてることは嬉しいことですね…」

ことり「そうだね♪頑張ってきた甲斐があつたよね♪」

新八「こんにちわー。あれ？お客様？つて…ま、まさか！ μ , sのみなさん!?」

銀時「…んだ？新八も知つてんのか。さすがアイドルオタクだな。」
新八「知つてるも何も、前回のラブライブの優勝者で、今江戸じやおそらく一番有名なスクールアイドルですよ！」

神楽「銀ちゃん！あがつてもらうアル！エリーチカのロシア時代の話とかエリーチカがポンコツになつたきつかけとか詳しく聞いてみたいネ！」

新八「神楽ちゃん、エリーチカはポンコツじゃないからね？さあ上がつてください！」

穂乃果・ことり・海未「おじやましまーす」
万事屋に入る μ , sの3人。

新八「ちよつと待つてくださいね！お茶いれますから！」
お茶をいれに台所にたつ新八。すると奥から定春がやつてきた。

定春「わん！」

ことり「やくんカワイイ♪」

神楽「この子は定春ネ！おとなしくてカワイイ子よ！」

穂乃果「定春つて言うんだ？大きい犬だねえ！でもホントにおとなしくてカワイイ♪よしよし♪」

海未「お、大きいなんてレベルじゃないです！穂乃果…ことり…そ、そんなに近寄つて大丈夫なのですか⁈」

穂乃果「海未ちゃん大丈夫だよ～ほら～もふもふしてて気持ちいいよ♪」

銀時「おーい定春。そこいると仕事の話できねえだろ。あつちに

⋮」

銀時が定春をあつちに行かせようとした瞬間…

ガブツ

銀時の頭に噛み付く定春。

海未「う、あ、あ、あ、あ、あ、!?」

新八「はい、お茶どうぞ！あれ？どうしたんですか？」

椅子に座る万事屋3人と、Sの3人。

銀時「…俺あこの万事屋の社長の坂田銀時だ。それでその、スクールなんちやらが何の依頼で来たんだ？」

海未「…あの、頭から血が出てますけど？」

神楽「安心していいネ！銀ちゃんはこのくらいで死ぬタマジやないアル。私は神楽！よろしくアル！そしてこつちのムツツリメガネが新八ね！」

ことり「…あはは。」

新八「誰がムツツリメガネだ！新八です！よろしくお願ひします！」

いやあ感激だなあ…まさかこうやつて、Sのみなさんに会えるなんて！…そういえば、Sつてもうすぐ大きいライブがありますよね

？」

海未「はい、スクールアイドルみんなが参加する合同ライブを計画してまして、あと2週間後に行うことになっています。」

ことり「今はその準備や練習で毎日忙しいんですけど…」

穂乃果「実は：万事屋さんにお願いが…」

神楽「お願ひって何アルか？」

ことり「穂乃果ちゃん…」

海未「穂乃果…」

少し言いにくそだつたが、意を決して穂乃果は話し始めた。

穂乃果「今度のライブ、私たちと一緒に出てもらいたいんです。」

万事屋「…

万事屋「マジでかーっ！？」

六
四
八

外見だけで人を判断しちゃダメ

穂乃果「今度のライブ、私たちと一緒に出てもらいたいんです。」

穂乃果の表情は真剣だった。

神楽「穂乃果ちゃん！はやまつたらいけないね！カワイイ神楽ちゃんはともかく、こんな加齢臭漂う天パのマダオと、イカ臭いムツツリメガネがライブに出たらもはやラブライブじゃなくて恥部ライブになつてしまふヨ！生臭くて会場がゲロまみれになつてしまうアル！」

新八「誰がイカ臭いムツツリメガネだ！」

銀時「天パのマダオが恥部愛撫つてか？」

新八「おい、やめろ。でもどうして僕たちをライブに？だつて9人でライブに出るんじや…」

海未「…それが、実は、Sの3年生3人が宇宙旅行から戻つて来れなくなつてしまつてるんです…」

銀時「ほう…こんな時期に宇宙旅行たあ…いいご身分だな。」

新八「ちよつと銀さん！戻つて来れなくなつたつて…どういうこと？」

穂乃果「その3年生の一人のにこちゃんが、アキバの町内会の福引で、ハメツク星行きの旅行券が当たつたそなんです。それでその使用期限が3月末だつたみたいで、にこちゃんはライブ前だからつて遠慮してたんだけど…」

海未「もうライブで披露する曲目は十分リハーサルもできてましたし、せつかくなので3年生3人で卒業旅行を兼ねて行つてきてください！つて送り出したんです。予定では1週間なので、昨日帰る予定だつたんですけど…」

ことり「到着の時間になつてもハメツク星からの宇宙船が到着しなくて…そしたらニユースで…」

銀時「宇宙乱氣流か。」

新八「銀さん、知つてたんですか？」

銀時「ああ。この時期に珍しいなんて思つて見てたんだが…あれが起ると宇宙船は当分飛ばせねえ。運が悪かつたな…」

穂乃果「…それで希ちゃんから前に聞いてた万事屋さんにお願いしに来たわけなんですけど…」

間を置いて、銀時がゆっくりしゃべり始めた。

銀時「…穂乃果ちゃんつつたか？」

穂乃果「はい！」

銀時「俺たちは万事屋だ。だけどスクールアイドルじやねえよな

？」

穂乃果「はい…」

銀時「俺たちは金さえもらえばどんな仕事も引き受ける。だけどな、俺たちみたいな素人が代わりにライブに出たところで…なんになる？ファンからすれば侮辱とも取れる行為だ。ファンは俺たち万事屋じやねえ…」*s*を見に来てるんだ。いくら頭数合わせと言つたつてそれはちょっと違うんじやねえか…？」

ガラララ…

銀時はそう言うと立ち上がりつて奥の部屋に行つてしまつた。

海未「…確かにそうですね、何を考えていたんでしようか私たちはずぎてたね…」

穂乃果「うん…ライブは私たち6人で頑張ろう！」

新八「穂乃果ちゃん…」

ガラララ…

すると奥から銀時が戻つてきた。

新八「え…」

銀時「につこにつこにー☆こんな感じでどうだらうか？」

そこには女装して天パの髪をツインテにした銀時が、にこにこに一のポーズをして立つていた。

新八「オイイイイイ！ノリノリかよ！とんでもない天パのオツサンがμ,sの新メンバーとして加入しようとしてるよ！ラブライバーに殺されるぞ！…つてあんた、スクールアイドル知らなかつたんじやねえ

のかよ！」

穂乃果「…すごい、にこちやんだ！」

新八　いや　どうみても銀さんだけど?」

「ああ、共通点はソインテつーばなうジガバーバー」

天パのオツサンじやないよね?」

」**」**と「**」**れで後はエリちゃんと希ちゃんだけだね♪」

新八「三人の話を聞いてる」

ガラララ：

神樂 ハラアアアアアアシヨオオオオオオ！

新刊一七〇三

そこにはおかつぽ頭のヅラをかぶつてなぜか楠田枝

ネをする神楽が立っていた。

新八「オイイイイ！なるほど・ザつて・同じエリでも楠田エリーチ
ジやねえ

かつと読んでるよー。」

神楽「細かいこと言うなよ新八。しかも苗字が楠田つてくつすんと役ネ。一楠田で二度おいしいネ！」

穂乃果「エリちゃん！」

新八 「どこもエリちゃんに寄せてないんですけどお!？」
梅未 「くっすん、田人や。ウチを入れて。」

新八「何と言つてるの?」

新八 「もうツツコミたくないです…」

銀時 「これでなんとかなりそうニコツ☆」

神楽 「キンキン、次のクイズはジャンピングチャンスアル！」

新八 「なんとかなるどころか、s 自体どうにかなつちまうわああ！…みんなボケ始めてツツコミが追いつかない…どうすれば…！」

ガラララ…

「あら、みんなお揃いね♪」

そこに現れたのは…：

新八 「その声は…姉上！」

新八の姉のお妙だつた。

お妙「μ, s の一大事つて聞いて…ちょっと来てみたのよ。はい、こ
れ差し入れ♪」

新八 「えつ、誰に聞いたんですか？ん…差し入れ？」

お重の箱を開けると、そこにはもはや原型を留めていない、むしろ
どこの星の未確認物体かもわからないダークマター卵焼きが禍々し
いオーラを放ちながらうごめいていた。

銀時「おい、そんな帝国軍御用達みたいなダークマター差し入れて
…ただでさえμ, s メンバー3人いなくなつてるのに全滅させる気か
…ブホッ！」

お妙の高速の腹パンが銀時の内臓をえぐる。血を吐いて倒れる銀
時。

お妙「あら、食べれないって言うの？新ちゃんは食べるわよねえ♪」

新八 「ははは…僕はほら、朝ご飯たくさん食べたからお腹いっぱい
で…」

お妙 「食べるわよね？」

新八 「いただきます！…グハツ！」

白目をむいて倒れる新八。

神楽 「姉御、差し入れだけのために来たアルか？」

お妙「いえいえ違うわよ！きっと困つてると思つて…ある人を連れ
てきたの♪」

新八 「ある…人？」

ガラララ…

新八 「ある人つて…」

銀時 「てめえか…」

源外 「いよいよ銀の字！久しぶりだな！」

つづく

見た目より大事なのは中身

穂乃果「あのう…この方は？」

新八「江戸随一の天才カラクリ技師、平賀源外さんです！何か役に立つすごいカラクリを持ってきたんですか？」

銀時「おい、何しに来たんだ？お妙といい…なんかうまく話が出来すぎじゃねえか？」

少し不審がる銀時にお妙は事情を話し始めた。

お妙「実は私も源外さんも、あるム、Sのメンバーから事前に依頼されたのよ。」

神楽「どういうことアルか？私たちより前に依頼されてたアルか？」

穂乃果たち3人も不思議そうな顔をしていた。

穂乃果「ことりちゃんが依頼したの？」

ことり「知らないよ今日ここに来たのも初めてだし…」

穂乃果「じやあ海未ちゃん？」

海未「私も存じませんが…まさか…」

海未は少し考え込むと

海未「希…ではないですか？その依頼したム、Sメンバーって…」

ことり「希ちゃんが？」

源外「そのとおり。東條希。彼女にお願いされたわけよ。」

銀時「…どういうことだ？全然話が見えねえんだが…」

混乱してきた万事屋と穂乃果たち。そしてゆっくりとお妙が話し始める。

お妙「希ちゃんとはね、私は前から知り合いだつたのよ。神田明神で知り合つて…」

穂乃果「そつか！希ちゃん神田明神の巫女さんだもんね！」

お妙「そうなのよ。そこで旅行の話も聞いて…実はその宇宙旅行に行く3日前くらいだつたかしら…希ちゃん変な事を言つててね…」

新八「変なこと…？」

お妙「そう…ひょつとしたら宇宙から帰れなくなるかもしけない、

その時は、Sの力になつて欲しいって。そのときは何をバカな事言つてるのよつて冗談まじりに会話してたんだけど…」

静まり返る室内。続いて源外が話し始める。

源外「それで俺のところにも旅行に行く前に来てな。同じような事を言つて帰つてつたよ。…まあ、元々不思議な力を持つてる子だつたから俺あなんとなく予感はしてたがな。」

海未「希がそんなことを…」

穂乃果「それよりも希ちゃんの交友範囲の広さつて一体…」
ことり「あははは…でも、嫌な予感当たつちゃつたよね…。希ちゃん、みんなに言つて旅行やめることはできなかつたのかな?」

海未「にこもエリーアも楽しみにしてたみたいですから…確信もなかつたし、今さら旅行やめようとも言えなかつたのでしよう…」
銀時「…それで。江戸随一のからくり技師が頼まれてアイドルロボットでも作つたつてか?」

源外「勘がいいじやねえか銀時よ!」

新八「えつ…ホントですか!?さすが仕事が早い!」

神楽「アイドルロボットでオタクたちの夢と股間膨らませてどうするネ?」

新八「神楽ちゃん、やめて。膨らむのは夢だけだから。」
すると外から仰々しい音がする。

ゴゴゴゴゴ…

新八「何の音だろう…こ、これがアイドルロボットですか?」

源外「とくと見やがれ!」

そして部屋に入つてきたのは…

ガシーン!キュイ〜ン:

『コンバンワ!ワタシハ、楠田枝〇…』

新八「なんでだアアア!!」

そこに現れたのはネオアームストロングサイクロンジエットアーマストロング楠田エリーカロボだつた！

完成度高えなオイ！

ガシーンガシーンガシーン…

源外「どうだ？ 完成度高えエリーカロボだろ！」

新八「だからそつちのエリーカロボじゃねエエ！ なんでそつちのエリーカの完成度高めようとしてんですか！」

キュイ〜〜ン！

源外「胸がドリルになつてだな…」

新八「やめろオオオ！」

穂乃果「エリちゃん！」

新八「だから違うつて言つてるでしょ!?」

海未「エリー…ずいぶん老けましたね…」

新八「いや、失礼だからね？ エリちゃんじゃなくて楠田さんに失礼だからね？」

ことり「ねえくっすんなの？ それともエリちゃんなの？」

新八「ことりちゃん、呼び方の問題じやないから…ちょっと、源外さん！ マジメにやつてくださいよ！」

源外「おつと、悪い悪い。こいつあ全自動卵割り機試作30号機

だつたわ。」

新八「どんだけ卵割り機に情熱注いでんだ!!」

神楽「どうやつて卵割るネ？」

源外「こうやつて口の中に卵を入れてだな…」

新八「やらなくていいわ！」

源外はゴソゴソと持つてきたバックの中を探り始めた。

源外「まあそう怒るなよ！ ええと…どこにあつたかな、あつた！ 銀

の字、こいつをつけてみろ！ ほら、お前たち二人もだ！」

源外は、黒いホクロのような物を銀時、神楽、新八に手渡した。

新八「え、なんですか？ これ…」

銀時「なんだこれ…まるでハナクソじやねえか…。」

神楽「まんまハナクソアル。」

源外 「いいからそのハナク…ホクロを額につけてみろ！」

銀時 「今ハナクソつて言おうとしたよね？ 何ハナクソ額につけさせようとしてんの？」

源外 「話は後だ！ さつさとつけやがれい！」

銀時 「ろくでもないことにならなきやいいがな…」

そして銀時はそのハナク…ホクロを額につけた。

すると…

穂乃果 「えつ!?」

海未 「す、すごい…！」

ことり 「うそ…！」

神楽 「マジでか！」

新八 「これって…まさか…」

そのままかである。ハナク…ホクロをつけた銀時はまったくの別人に変身したのである。

矢澤にこのチャームポイントのツインテールの髪型、ノースリーブにネクタイ、ミニスカートにサイハイのブーツ、黒のヘッドセットにエメラルドグリーンの髪色…

新八 「…つてこれ初〇ミクじやねえかアアアアア!!」

ミク（銀時）「みつくみつくみー☆」

新八 「やめろオオオオ！」

穂乃果 「にこちゃん！」

新八 「いや、似てるのは髪形だけでそもそも身長とか色とかもう何もかも違うよね？」

海未 「…にこより全然カワイイです。」

新八 「ある意味それ問題だよね？」

ことり 「もう…このにこちゃんでいいよね♪」

新八 「このにこちゃんはにこちゃんじやねエエエ！ 3人にツツコむのは疲れるわ…」

神楽 「私もつけてみるアル！」

すると神楽の姿もみるみるうちに変化した！

エリーチカのトレードマークの金髪にボニー・テール、青色の目、グラマラスなボディ…高い鼻…コサツクダンスの衣装…手にはマトリヨーシカ…

謎のロシア人（神楽）「У ми ло и вар ил о…」

新八「誰だアアアア！」

ミク（銀時）「いや、変わつてねえで新八もつけてみろ。」

新八「そんな可愛い顔で言われても…わかりましたよ。どうなつても知りませんからね？」

ポチッ

新八の姿もみるみるうちに…

新八「…あれ？ 何も変わつてない気がするけど…」

ミク（銀時）「いや、変わつてね。」

謎のロシア人（神楽）「О на ват и з ме н и л а」

新八「え、どこがですか？」

穂乃果「メガネが…」

海未「このメガネは…」

ことり「花陽ちゃんのメガネ…」

新八「つてメガネだけかいいい！」

お妙「源外さん。おふざけはこれくらいにして…ね？」

源外「悪い悪い！ これは失敗作だつたわ！」

新八「失敗作持つてくんじやねエエエ！」

そして源外は別のハナク：ホクロを万事屋の3人に手渡した。

源外「こいつあな、見た目だけを変化させたカラクリだ。外見が全く変化してゐるわけじゃねえ。錯覚を利用して…他の人間からはまったくの別人に見えるつて寸法だ。」

そして銀時、神楽、新八の3人が真・ハナク…ホクロをつけると…！

穂乃果・海未・ことり「すごい…」

銀時の姿は矢澤にこ、神楽の姿は絢瀬絵里、そして新八の姿は東條希に（見た目だけ）変化した！

お妙「すごいわ源外さん！もう全然万事屋の3人には見えないわね。」

源外「俺ができるのはここまでだ。後はお前たちでなんとかしな！」

お妙「源外さん、ありがとうございました。」

源外「お代はツケとくからな！じゃあな！」

そう言うと源外は帰つていった。

にこ（銀時）「見た目だけねえ…」

絵里（神楽）「見た目だけボインチカになつてしまつたネ！嬉しいア

ル！」

希（新八）「その顔でボインチカとか言わないで神楽ちゃん。でもこのカラクリ…すごいですね…これで何とかなりそうじゃないですか！」

穂乃果「うん！すごい…すごいよ！やつぱり万事屋さんに依頼してよかつたよ…！ねえことりちゃん海未ちゃん！」

ことり「そうだね穂乃果ちゃん♪」

しかしその様子を見ていた海未は厳しい顔をしていた。

穂乃果「海未ちゃん、どうしたの？怖い顔して…」

海未「見た目は確かに変わりましたが…そう簡単にはいきませんよ。」

ことり「海未ちゃん…？」

海未「変わったのは見た目だけ…もちろん中身はスクールアイドルとしては…ずぶの素人そのものです。」

穂乃果「まあ…そうだけど…」

海未「今からライブまで…特訓です！」

う
る
べ

見た目より中身といつても限度がある

海未「今からライブまで特訓です！」

穂乃果「そうだね・時間もあまりないし・」

ことり「その前にまずは真姫ちゃんたちと顔合わせしないとだね

♪

にこ（銀時）「とにかく時間もねえから今から顔合わせして特訓だな。あ、にこつ。」

新八（希）「語尾に『にこつ』はつけませんから銀さん。」

絵里（神楽）「音ノ木坂学院に潜入ちかアア！」

新八（希）「ちかアとかも言わないから！潜入じやなくて堂々と正面から入りますよ！」

ことり「新八君、希ちゃんは関西弁だよ？」

希（新八）「せ、せやなあ」

絵里（神楽）「私はロシア語がいいアルか？」

海未「日本語でお願いします。」

穂乃果「万事屋さん、それじや真姫ちゃんたちを部室に集合させる

から2時間後に音ノ木坂学院までお願いします！」

そして穂乃果は真姫、花陽、凜の3人に連絡を取り、かくして変身した万事屋の3人と音ノ木坂学院にて対面することになったのである。

（音ノ木坂学院 スクールアイドル研究会部室）

真姫「ねえ花陽」

花陽「ふあに？ふあひひやん・モグモグ」

真姫「口の中のもの飲み込んでから喋りなさいよ。」

凜「モグモグ食べるかよちんも可愛いにやー」

真姫「はあ・あなたたちは不安じやないの？」

花陽「ん？万事屋さんのこと？」

凜「なんでも屋さんだよねーでも凜たちのライブと何が関係あるんだろうね？」

真姫「穂乃果は秘密兵器とか言つてたけど…それにしても後2週間… いまだにハメック星に行つたにこちゃんたちとは連絡取れないし… 無事かしら…」

花陽「不安だよ… ニュースでは宇宙乱気流のせいで足止めされるだけみたいだけど…」

ガチャ

穂乃果「真姫ちゃんただいまー！連れてきたよー万事屋さん！」

そして入つてきた3人を見て真姫、花陽、凜の3人は言葉を失う。ハツと思い出したように真姫が喋り始める。

真姫「にこちゃん!? 帰つてきてたの!? どうして連絡くれないのよ！ すごく… すごく心配したんだからね…」

花陽「みんな無事だつたんだね！」

凜「真姫ちゃんだけじゃないよ！ 凜もかよちゃんもみんな心配してたんだからね！」

涙ぐむ3人。

部室内は一転して感動の再会ムードに変わる。

たまらず小声で神楽が新八に耳打ちをする。

絵里（神楽）『…新八。なんか言い出しにくい雰囲気アルな。』

希（新八）『今さら僕たちって言つたら暴動起きそうなレベルだよ』

真姫「希も… 絵里も… ホントに無事でよかつた…」

希（新八）「あ、あの… 真姫ちゃん」

すると遮るように銀時が真姫に話しかける。

にこ（銀時）「真姫！」

真姫「何よ… グスツ」

にこ（銀時）「鼻水出てるニコツ☆」

希（新八）「オイイイ！ 何言つてんだアア！」

絵里（神楽）「Хорощий」

希（新八）「なんでロシア語だアア！しかもハラショーってなんだよ！」

真姫「」

ようやく真姫は事の異変に気づく。

希（新八）『あつ・ついツツコミを』

真姫は顔を真っ赤にしてたちまち怒りの表情に変わる。

真姫「・もうなんなのよ！イミワカンナイ！」

穂乃果「真姫ちゃん、落ち着いて？」

ことり「そうなの、この人たちは」

海未「万事屋さんなのです。」

真姫「はあ？ちよつと何言つてるかわかんないんだけど。どう見て

も本人じゃない。」

希（新八）「何から話せばいいんだろう」

絵里（神楽）「鼻くそ付けて変身してるネ！」

希（新八）「説明がざつくりすぎる！」

花陽「マンガみたいな話だね」

凜「訳わかんないにや」

希（新八）「それについては何も言えない」

事の顛末を説明する穂乃果たち。

ようやく納得したのか、真姫がひとつ溜め息をついて喋りだす。

真姫「で、この3人が万事屋さんなのはわかつたけど、まさかこの3人を含めてライブするって言うんじゃないでしょうね？」

穂乃果「さすが真姫ちゃん！理解が早くて助かるー！」

真姫「はああ！無理に決まってるじやない！私たちがどれくらいの時間をかけてここまで来たと思つてたのよ！そんな簡単じやないわ！」

と、真姫は大声を出して反論する。

花陽「そうだよ・いきなり歌つて踊れつて言われても無理なんじや

ないかな・

凜「凜は面白いと思うけどなー」

真姫「何言つてるのよ！面白いとかそういう問題じゃないってこと！もしバレたらどうするのよ!?」

海未「真姫が不安になるのもわかります。ただ、今3年生の3人が地球に戻れなくなつた今、やるしかないのです。そのために今から1週間みつちり特訓をしようと思ひます！」

こどり「こどりも不安だよでも今度のライブは全国のスクールアイドル合同のライブだし、私たちの事情で失敗するわけにはいかないと思う。」

真姫「そんなの・残つた6人でやるしかないじゃない！イヤよ！付け焼き刃の3人を入れてライブなんて私は反対！」

花陽「花陽も・イヤかな」

凜「ん、凜も・イヤにや！」

穂乃果「真姫ちゃん・」

しばらく静かに見ていた銀時がゆっくり話し始める。

にこ（銀時）「ま、そういうこつたな。初めから素人の俺たちが関わる話じやなかつたづてことだ。」

希（新八）「でも・もう少し考えてみましょよ！他に何か方法がないか！」

にこ（銀時）「考へてもみろ。大観衆の前で今からたつた2週間練習した俺たちがいきなりライブだ。見た目は多少騙せてもわかるやつにはわかる。何よりチームワークガタガタじやあそれこそ笑いものだ。今まで、sの積み上げてきたものを跡形もなく壊すようなもんだろ。というわけで、俺は降りさせてもらうぜ。」

希（新八）「ちょっと銀さん！」

バタンツ！

銀時は部室から出て行つてしまつた。

絵里（神楽）「なあ新八。私たちだけでも頑張つてみるネ！」

希（新八）「でも銀さんが」

穂乃果「『めんなさい！』」

穂乃果が突然大きな声で謝る。

ことり「穂乃果ちゃん」

海未「穂乃果」

穂乃果「私ちよつとどうかしてたね μ sは9人じやないどμ sじやないつてなんか1人で空回りして間違つてたね」

希（新八）「穂乃果ちゃん」

穂乃果「万事屋さんまで巻き込んでホントに『めんなさい！』これは私たち9人の問題。私たちでなんとかするべきだよね。わざわざ来てもらつたのにホントに『めんなさい』」

絵里（神楽）「ホントに大丈夫アルか？」

穂乃果「うん なんとかしてみるよ！」

ことり「穂乃果ちゃん それでいいの？」

海未「本当に それでいいのでしょうか？」

その時だった。

テンテロリントンテントテントテン♪

テンテロテンテロリントンテントテントテン♪

穂乃果のスマホの着信が鳴り響く。

穂乃果「誰だろう もしもし」

「だーれだ？」

穂乃果「えつまさか」

希『もう少し会わない間にウチの声も忘れてしもうたん？』

穂乃果「希ちゃん！」

つづく

何事もノリとタイミング

希『もう少し会わない間にウチの声も忘れてしもうたん?』

穂乃果「希ちゃん!」

電話の声はハメツク星に旅行中の東條希だった。

部室内がざわつき始める。

穂乃果「電話できるようになつたんだ!みんな心配してたんだよー！」

穂乃果はスマホをスピーカー通話に切り替える。

海未「にこやエリーは無事なのですか?」

希『心配かけてごめんなあ。にこつちもエリチも無事よ。携帯電話は宇宙乱氣流のせいで全然使えへんのよ。』

ことり「えつ?じゃあ今電話してるのって?」

希『現地のハメツク星人と仲良くなつてな、テレパシーで通話してるんよ。頭の触覚を握つて。』

希(新八)「突然S.F.要素ぶつ込んできたアア!頭の触覚握つてどんな絵なんですかね?」

希『肩車してな、両手で触覚握つてるよ。ロデオスタイルやね♪』

希(新八)『ロデオスタイル・大丈夫なの?それ。』

希『ん?なんかウチの声がすると思つたら・ああ、源外さん力になつてくれたんやな♪やつぱりウチのタロット占いは怖いくらい当たつてまうなあ・今回ばかりは外れて欲しかつたけど・あはは』

声なく笑う希。

静かに聞いていた真姫が身を乗り出して喋り始める。

真姫「あははじやないわよ!んもう!まつたく・希にはお見通しだつたつてわけね?」

希『ごめんなう真姫ちゃん。色々心配と不安もあつたやろ?』

真姫「いいわよそれは・それよりそつちの状況はどうなつてるの?』

しばらくの沈黙の後

にこ『真姫!』

真姫「にこちゃん！」

真姫がさらに身を乗り出す。

にこ『にこがいなくて半べそかいてたんじやないのー？』

真姫「な、何言つてるのよ！バカじやないの！」

凜「真姫ちゃん鼻水垂らして泣いてたにや！」

真姫「もう！あればそういうので泣いてたんじや 穂乃果たちが何も説明しないし・つてそんなことよりそつちの状況は!?」

絵里『それは私から説明するわね。』

絵里が低いトーンでゆっくり話し始める。

ことり『絵里ちゃんも元気そうでよかつた！』

絵里『ことり。ごめんねみんな、心配かけて。今は現地の最長老様の家に泊まさせていただいているの。』

絵里（神楽）「クリリンたちの能力を引き出した最長老様アルな。」

希（新八）「熱烈なDBファンしかわからないネタを言わないで神楽ちゃん。つて、ん？もしかしてロデオスタイルで話してるのつて」

希『最長老様よ♪』

希（新八）『最長老様にロデオスタイルして話してたアアア！色々と大丈夫なのそれ！』

希『んうウチも遠慮してたんやけど、意外とノリノリやつたよ♪』

希（新八）「最長老様がいい人でよかつた。」

絵里（神楽）「私も乗りたいアル！」

希（新八）「神楽ちゃんが乗つたら触覚引きちぎりそうで怖いよ。」

絵里『意外と頑丈なのよ触覚。少しヌメヌメしてるけど。しかしその声・ホントに私と話してるみたい。ビックリだわ。』

絵里（神楽）「Какой у тебе уже на сег

одня？」

希（新八）「どこでロシア語覚えたの神楽ちゃん。」

絵里『Сего дня вечером к арри』

希（新八）「ロシア語で返したアア！」

海未「今夜はカレーなのですね。ハメツク星のカレーでハメカラーチてところでしょうか。」

希（新八）「海未ちゃんはロシア語理解できるのね普通に。つて何の会話だよ！ハメカレーって言うのやめて！」

凜「ロシア語かあ、ハメック星の言語かと思ったにや・ハメカレー凛も食べたいにや！」

花陽「お米とハメルーのコラボレーション…たまらないです。」

希（新八）「ハメルーって言うのやめろオオオ！」

絵里『最長老様によると、宇宙乱氣流が今まで経験した事のない強さらしくて・宇宙船が足止めされてしまつた私たちをここまでハメック星の方たちが案内してくれたのよ。今のところ、帰る見込みは立たない状況ね』

花陽「やつぱりまだ帰れないんだ…」

希（新八）「でも、この宇宙乱氣流つておかしくない？去年100年振りとか騒いでたのに2年連続で発生するなんて…しかもハメック星の最長老様も経験したことのない強さつて…」

ガララツ

突然部室のドアが開く。

にこ（銀時）「何やら裏で手を引いてるヤツらがいるみてえだな。」

希（新八）「銀さん！戻つて来てくれたんですね！」

にこ（銀時）「小便してきただけだ。」

海未「にこの姿で下品な言葉を発さないでください。」

にこ『うげ・ホントに私が二人いるみたいね』

にこ（銀時）「おつ、本物のにこちゃんか。色が緑で頭がお尻の形の。ん？にこちゃんつてハメック星人？」

にこ『それはニコちゃん大王よ！確かに触覚生えてるけど…つて違一う！』

穂乃果「銀さん、ネタが古すぎだよ！」

海未「ネタがわかる私たちも大概ですが。」

・そこは読者のみなさんもツツコまないようにしてよ！

にこ（銀時）「あれつてトイレはやつぱり頭から…」

希（新八）「まだアラレちゃんネタ引っ張るんかいイイ！」

ドカツ

海未に思いつきり殴られる銀時。

にこ（銀時）「ぶつたね！父さんにもぶたれたことないのに！」

海未「・今度変なこと言つたらタダじやすみませんよ。」

銀時に笑いながら語りかける海未の目は全然笑っていない。殺意すら感じる。

にこ（銀時）「なんかすみません。」

にこ『私じゃないけど殴られるとなんか複雑だわ』

希（新八）「銀さん、それよりも裏で手を引いてるヤツがいるつて」
にこ（銀時）「今はまだ憶測の範囲でしかないが、この宇宙乱気流は人為的に引き起こされてる可能性があるってことだな。」

穂乃果「誰がなんの為にそんなこと？」

にこ（銀時）「断定するのはまだ早い。今はまだ憶測に過ぎねえ。俺たちには今できることをやるしかねえってこつた。」

希『みんな、こつちはこつちで帰れる方法を見つけるから、今は万事屋さんの力を借りて頑張つてほしいんよ。』

真姫「でも・」

にこ『にこ達は必ず戻つてみせるわ。それまでに、Sをライブをやり遂げて欲しいの。』

絵里『お願いみんな。これは私たち3年生の願いでもあるの。』

真姫「・」

少し考え込む真姫。しばらくして意を決した表情で喋り始めた。

真姫「わかつたわ。そのかわり・必ず戻つてきてよ。」

にこ『あつたり前よ！私を誰だと思つてるの？宇宙ナンバーワンアイドルの矢澤にこよ！』

ことり「文字通り宇宙ナンバーワンになれそうだね♪」

にこ『ハメツク星人もみーんなにこの魅力にメロメロよ！』

凜「タジタジの間違いじやないかにや？」

にこ『何よ！』

部室内が笑いに包まる。

絵里『こつちは大丈夫よ！心強い人たちも一緒にだから！』

ことり「心強い人たち？」

希『そろそろ時間みたい。長い時間のテレパシーは体の負担が大きいみたいやから』

希（新八）「最長老様結構無理してたアア！」

絵里『絶対間に合うようにこつちも色々頑張るから それまでお願いね。穂乃果。』

にこ『会場を温めとくのよ につこに』

ブツツ

ツーツーツー

希（新八）「通話の切れ方に悪意ありすぎでしょ。」

穂乃果「心強い人たちが付いてるつて言つてたし 大丈夫かな？」

海未「誰なんでしょう？」

花陽「ふふつ 不安なのはにこちゃんたちのはずなのに花陽たちが元気づけられちゃったね。」

凜「ホントだね！ 凜たちの出来ることをやろう真姫ちゃん！」

真姫「希たちに任せられたやるしかないじやない。それで海未、どうするの？」

すると神楽が突然机に飛び乗り叫ぶ。

絵里（神楽）「真姫ちゃんちの別荘でバーべキューちかアア！」

希（新八）「なんでだアア！！」

ことり「合宿だね♪ 神楽ちゃん！」

絵里（神楽）「そうヨ！ 親睦を深めながらスクールアイドルの特訓もできて一石に蝶アル！」

希（新八）「それじや石に止まつた蝶だよ神楽ちゃん。一石二鳥ね。」

凜「楽しそうにやー！」

花陽「残された時間も少ないし いいかもしねいね！」

穂乃果「あはは！ いいね合宿！ それしかないと感じ！」

海未「私は最初からそのつもりでしたが。」

真姫「ちょっと！ 勝手に話を進めないで！ 合宿はいいけど何で私の別荘なのよ！」

するところが少し上目遣いで瞳を潤ませ見つめながら真姫に語りかける。

ことり「お願ひ・真姫ちゃん。」

にこ（銀時）「お願ひ・にこつ。」

真姫「にこちゃんの顔でお願いするのは反則よ！」

それに合わせるように全員、拾われた子犬のような目で真姫を見つめる。

真姫「ちよ・・・」

無言で見つめる子犬たち。

真姫「んもう！わかつたわよ！やればいいんでしょ！いいわよ・別荘使つても。急で他に泊まれる所もないだろうし・・・」

全員「ヤツタ―！」

絵里（神楽）「肉は100人前お願ひアル！」

真姫「どれだけ食べる気よ！・・・」

にこ（銀時）「遊びに行くんじゃないんだぞ神楽・酒もお願ひします。」

海未「高校生はお酒は飲めません。」

穂乃果「水着も持つて行かなくちゃ！・・・」

ことり「穂乃果ちゃん・遊びに行くんじゃないってみんな言つてるのでに。」

穂乃果「冗談だよーことりちゃん！」

希（新八）「ム・・・のみなさんと合宿なんて・緊張するなー」

絵里（神楽）「ニヤけてマジキモイアル。」

花陽「美味しいお米があるから持つてくるね！」

凜「凜もお菓子いっぱい持つてくるにやー！」

真姫「・ああ疲れるわ。」

つづく

長所と短所は紙一重

合宿を決めた日の翌日。

μ, sと万事屋のメンバーは、真姫の別荘に集まつた。
（西木野家別荘）

デデン！

希（新八）「で、でかい別荘。」

花陽「何回見ても圧倒されちゃうね。」

凜「楽しみだにやー！」

絵里（神楽）「お腹空いたアル（^m）」
2階建ておよそ1000^mはありそうな豪華な別荘である。中に
入ろうとすると扉が開く
ガチャツ

「いらっしゃいませ（^u）」

にこ（銀時）「ぶつ！」

希（新八）「えつ？」

絵里（神楽）「マジでか！」

真姫の別荘から出てきたのは

マダオ「真姫様（^u）中の掃除は済んでます！」

希（新八）「長谷川さんんん！なんでここに!?」

マダオ「いやあ（^uすゞ）い日給もいいから昨日から泊まり込みで管理

人をつてなんで俺の名前知つてるの？」

にこ（銀時）（おい新八！長谷川さんには俺たちの事は伏せとこう。

あまり広く知れ渡ると面倒なことになりそうだからな。）

希（新八）（わかりました）

希（新八）「その（^u）長谷川さん（^u）長谷川（^u）博己にソックリだな（^u）と思つて！あははは！」

マダオ「あ（^u）！たまに言われるよ！やつぱり似てる？ハハハ！」
にこ（銀時）「ぶん殴りてえ。」

マダオ「ん？なんか言つた？」

希（新八）「いやいやいや何でもないですよ（^u）！（ちょっと銀さん

！」

絵里（神楽）「マダオ、何してるアルか？」

希（新八）「神楽ちゃんんんんん！！」

マダオ「えつ？ マダオ？ 神楽？ アンタらつて……」

希（新八）「ま、まずいですよ銀さん……」

マダオが不審そうな顔で3人を見ている。

真姫「長谷川さんありがとう。どうしたの？ 中に入らないの？」

にこ（銀時）「先に中に入つてて にこつ♪」

μ， sメンバートが中に入つたのを確認する銀時。

マダオ「なあ・アンタらつて・」

にこ（銀時）「あつ!! 長谷川さんの元嫁がいる!!」

マダオ「え?! どこど、?!」

銀時の指さす方向をマダオが振り向いた次の瞬間。

ドカツ！ バキッ！

銀時はマダオに強烈な一撃、いや2撃くらい食らわせて氣絶させた。

白目を向いて倒れ込むマダオ。

希（新八）「なんか可哀想なことしましたね。」

にこ（銀時）「まあ仕方ねえ・あまり俺たちの存在は知られない方が後々良さそうだしな。」

絵里（神楽）「とりあえずその辺に寝かせとくネ。」

マダオを玄関の隅に寝かせると万事屋の3人も別荘に入つた。

海未「まずは各々荷物を置いたらリビングに集まつてください。今後のスケジュールを発表しますので……」

真姫「部屋は3つ、1年生と2年生、万事屋さんで分けましょう。」

にこ（銀時）「あと新八、神楽。」

希（新八）「なんですか？」

絵里（神楽）「ふあにふあるふあ？」

真姫「ちよつと！ まだ肉は食べないで！」

にこ（銀時）「ここからは俺たちも名前で呼び合のはやめとこう。宇宙乱氣流を起こした何者かが判明するまでは俺たちが絡んでる事

は伏せた方がいいだろう。まあ見た目でそうそうバレはしないだろうがな。」

希（新八）「そうですね・わかりました！」

絵里（神楽）「真姫ちゃんおかわりアル！」

真姫「だから食べないで！」

30分後、リビングに集まる、Sと万事屋。

海未「集まつてくれましたね。」

真姫「ねえ海未、とりあえずお昼ご飯用意してるから食べてからにしない？」

海未「・それもそうですね。腹が減つては戦はできませんし！」

希（新八）「銀さんより侍っぽい人だなあ」

マダオ「お待たせしました」

そこには豪華な料理がテーブルいっぱいに並べられていた。

「いただきまーす！」

花陽「わあ～！美味しそう！すごい豪華だねえ！」

ことり「ホントだね♪どれから食べようか迷っちゃう♪」

真姫「長谷川さん大丈夫？さつきは玄関で倒れてたけど。」

マダオ「いやあ～張り切りすぎて疲れてたのかな～ちょっとだけ記憶が飛んでるんだよね～」

穂乃果「・大丈夫じゃなさそうだけど。」

希（新八）（銀さん、記憶喪失って・なんとかバレてなさそうですね。）

にこ（銀時）（まあ結果オーライだな。）

絵里（神楽）「マダオ、おかわりくれよ。」

希（新八）「つて、オイイイイ！かぐ・絵里ちゃんシン！」

マダオ「ん？マダオ？」

希（新八）「あ、いや、まだおかわりあるかな～って！」

マダオ「ああ！いっぱいあるからどんどん食べてよ！」

海未「しかしこれだけの料理を長谷川さんが一人で作られたのですか？」

マダオ「さすがに俺には作れないよ～ハハハ」

真姫「専属の料理人を呼んでるのよ。」

「お気に召したかい？お嬢ちゃんたち。」

そこに現れたのは黒いスーツに身を包んだ色男が立っていた。

真姫「紹介するわ！今回特別に料理を作つていただいてるサンジさんよ！」

希（新八）「なんでもアリだな。もう。」

説明しよう。サンジとは麦わら海賊団のコックである！

・新世界にいるはずじや？とか言わない。

絵里（神楽）「もつとおかわり欲しいアル！」

サンジ「ほう、嬢ちゃん可愛い顔してウチの船長くらい喰うじやねえか！負けてらんねえなこりや！」

絵里（神楽）「どんどん持つてくるね！」

サンジ「任しどけい！」

海未「この後特訓なのですが。」

絵里（神楽）「腹が減つてはいい草はできないネ！」

希（新八）「戦ね。何か栽培するみたいになつてるから。」

凜「かよちんもいっぱい食べてるにやーー！」

花陽「こんな美味しい料理初めてだよ！」

ことり「花陽ちゃんも食べ過ぎないようにね♪」

つかの間のランチを楽しむ、Sと万事屋。

・そして食後のミーティングが始まった。

海未「ライブまでは2週間を切つています。この1週間の間に万事屋の皆さんにはチームワークを築いてもらうのと私たちの予定楽曲を覚えてもらわないといけません。」

ことり「ハーデスケジュールになりそうだねえ？」

凜「遊ぶ暇なんてなさそう。」

花陽「凜ちゃん遊ぶつもりだったの。」

海未「そこで、チーム分けをしてそれぞれ練習しようと思います。」

穂乃果「うんうん！」

海未「昨日私はあの後、万事屋さんにヒアリングをしてチーム分けはすでにあります。」

ことり「さすが海未ちゃん♪」

海未「こちらです！」

海未はA1サイズの大きな紙を壁に貼りだした。

そこには3つのチームに3人ずつ振り付けてある。

真姫「・ん？ちよつと待つて！私のチーム万事屋さん2人も入つてるんだけど！」

穂乃果「あれ？穂乃果のチームはことりちゃんと花陽ちゃん？」

海未「あえてユニットで分けました。」

真姫「無理無理無理！素人の2人を私が教えるなんて！」

真姫は大きく両手を振りながら拒否する。

ことり「真姫ちゃんならできると思うな♪」

穂乃果「真姫ちゃん天才たちってとだもん！」

凛「真姫ちゃん可愛いかきくけこにや！」

花陽「真姫ちゃんプリティぱぴっぺぽ！」

にこ（銀時）「真姫ちゃん西木野なにぬねのうにこつ！」

希（新八）「それ苗字言つてるだけですよ銀さん、あ、にこちゃん。」

絵里（神楽）「真姫ちゃんおかわり！あいうえおチカア！」

希（新八）「絵里ちゃんまだ食べてたの？」

黙り込む真姫。

真姫「」

海未「ダメですか？」

真姫「しようがないわね！天才のこの私に出来ないことはないわ！」

全員（チヨロい）

海未「それではユニットで分かれてください。そしてそれそれでわかりやすいようにチーム名を付けてください！」

チーム〈プリン隊〉

穂乃果「ファイトだよ！」

ことり「可愛いチーム名♪ことりのおやつにしちゃうぞ♪」

花陽「食後のデザートにピッタリな名前だね♪」

チーム〈璃々威園和威斗〉

海未「ビシバシ・きますよ!」

凜「海未ちゃん・目が本気にや・」

希(新八)「なんでこんな中一っぽいチーム名なの?お手柔らかにお願いします」

チーム〈ビビビの天パ男〉

真姫「何よ!?このチーム名!」

にこ(銀時)「気合い入るにこつ」

絵里(神楽)「お腹いっぱいで眠たいアル」

海未「…それでは3日間はそれぞれのユニットで特訓。残り4日は全員で合わせようと思います。」

穂乃果「海未ちゃん私たちは?」

海未「今度のラブラライブは全国のスクールアイドルとの合同なので他のチームと、sのライブでの動き、振り付けを再確認してください。あと、希たちから連絡も来るかもしませんし。もちろん練習も怠らないようにお願ひします。」

ことり「了解だよ♪」

こうして、ユニット分けからの特訓が始まったのであつた。

絵里(神楽)『真姫ちゃん、おやつはまだアルか?』

真姫『あなたのお腹はブラックホールなの?』

つづく

夏休みは始まる前が一番楽しい

チーム『璃々威園和威斗』のターン

?

希（新八）「ねえ海未ちゃん、どこに向かつてるの？」
璃々威園和威斗（以下、リリホワ）の3人はジャングルのような密林の中を歩いていた。

凜「なんか変な鳴き声聞こえるし迷ったんじゃないかにや」とすると、突然立ち止まる海未。

海未「あそこを目指します。」

希（新八）「どこ？」

海未が指差す方向を追つてみると、うつすら天空へ伸びる塔がある。

海未「あの塔のふもとまで行つて、それから頂上を目指します！」

希（新八）「正気なの？」

凜「なんかポツキーミたいに細い塔にや」

再び歩き出す3人。夕暮れになる頃、塔のふもとまでたどり着いた。

希（新八）「ちよこれつて」

凜「これを登るつて」

直径1メートルほどの頂上が見えないほど天空にそびえ立つ塔

そうこれは

カリン塔じやねえかアアア！！

海未「そう、カリン塔です！」

希（新八）「冗談だよね？頭おかしくなつちゃつたの？悟空だつて3

日くらいかかるからね？」

凜「こんなの登れるわけないにやー！」

海未「私はいつだつて本氣です！」

そう言うと海未はカリン塔に近づき塔を調べ始める。

海未「ありました。」

海未はボタンらしきものを押す。ブーンという機械音とともに力

リン塔の中心が開く。

海未 「さあ行きましょう！」

希（新八）「・エレベ
ター付いてんだアア！」

海未 「徒歩で登るなど一言も言つてませんが？」

希（新八）「まあそうだけど、問題はそこじゃないと思う。」

凛「この上に誰がいるにや？」

清元一ノリ、相一ノル

3人はエレベーターに乗り込む。

ゆっくり動き始め 徐々にスピードが上がる

海未「大氣園のギリギリノハコノヒト」

せんが
■
「

凛 なんか体が下に押し付けられるにや

希(新八)

梅末「これどうい、耐えねば、ヒラブライブこは出れ

凛「」んなの耐えれなくても出れるはずにやーーー!!」

ウララララ！

そしてあつという間に地上80kmほどの場所へ到達する。

卷之三

希（新八）「吐きそ。うなんですけど・」

凛一 空氣も薄いし、海未ちゃんケロツとしてるし、鉄人にや

「お元気ですか？」
「ううん、まだ」

希(新)「汎用」

海未 「仙豆です。」

海未一仙豆です。

?

凜「海未ちゃん何者？」

そう言いながら2人は仙豆を食べるとあつという間に元気になる。

仙豆知らない人はググってみよう！

新八はあたりを見渡す。

希（新八）「ん？ここって？」

海未「神様の神殿です。」

希（新八）「カリン様の所飛び越してきてるよ！」

海未「エレベーターを付けるに当たつて、カリン様の住居が建築基準法に引っかかつたらしいので撤去されたそうですよ。」

希（新八）「このエレベーターは建築基準法に引っからなかつたんかいイイ！ていうか神様なのに建築基準法氣にしてるんかい！」

海未「神様が規則を破るわけにはいかないのでしょうね。」

すると神様の神殿から誰か歩いてくる。

カリン様「おお海未ちゃんじやないか！久しぶりじやのう！」

海未「カリン様、お元気そうでなによりです。」

凜「可愛い！ネコが喋つてるにやー！」

そう言うと凜はカリン様に近づき頭を撫でる。

カリン様「ニヤニヤツ！やめるのじや！」

凜は構わず喉元をなでる。

カリン様「ゴロン」

カリン様は寝転んでしまつた。

海未「カリン様？」

ハツと我に返るカリン様。

カリン様「す、スマンスマン！つい気持ちよくてな！」

希（新八）「完全に手懐けられてる。海未ちゃんはカリン様と以前から知り合いなの？」

海未「私の師匠ですね。以前カリン塔を登った時に色々修行させてもらいました。」

希（新八）「登つたんかいイイ。海未ちゃんは何を目指してるので？」

桃白白くらいうら倒せそうだな」

海未「そんなことよりも、カリン様。この2人にも修行をつけてい

ただけないでしようか？」

凛・新八「ええええええ！」

希（新八）「ちょ・何言つてるの？僕らレツドリボン軍とでも戦うの
！？」

凛「凛は歌つて踊りたいだけにやー！」

海未はしばらく考え込むとゆつくり話し始める。

海未「・実は銀さんからお願ひされていたのです。未知なる敵との
戦いに備えて修行をしておいて欲しいと。」

希（新八）「そうなんだ・それにしても凛ちゃんは別にいいんじや
しうか？」
海未「自分の身は自分で守つて欲しいと思うのです・万事屋さんに
守つてもらつてばかりだと思わぬ犠牲を生んでしま・いそなうので
凛には黙つていて申し訳なかつたですが、わかつていただけないで
しうか？」

希（新八）「僕には申し訳なくないんでしょうか。」

凛はしばらく考え込んでいたが決心した顔で言つた。

凛「・海未ちゃんの気持ちわかつたにや。凛、強くなる！」

カリ・ン様「・決まりじゃな。」

海未「ありがとう凛。」

カリ・ン様「本来なら自力でカリ・ン塔も登つてもらうんじやが・事情
があるようだしのう。」

希（新八）「登つてたら途中で墜落して死んでたと思ひますが。」

海未「それでは修行開始です！」

希（新八）「なんか話が変わつてる気が」

つづく

人生はベルトコンベアのように流れる

チーム『プリン隊』のターン

穂乃果
アリスリ

花陽「ぐーぐー

ひたすら昼寝をしていた。

チーリ『ヒヒヒの天ノ男』のターリン

真姫の別荘から離れた小川のある空き地に来た銀時、神楽、真姫の3人。

おしゃう。」

にこ（銀時）「おう。」

真姫は目を閉じて深く呼吸をすると、腹筋を使つた力強い透き通る

うが罰戸を発する

絵里（神楽）「文字で見ると変な声出してるみたいアルな。」

「う、うるさいわね！私の後に続いて発声練習

真姫 「ああああああああああ」

紅里
(禪樂) ああああああああ||

真姫の美声の後に続く銀時と神楽の声はまるでジャングルの鳥の

鳴き声のような発声。

真姫「ちょっと！全然音程取れてないわよ？私の後に続いて？」
そう言うと目を閉じて頭の上から抜けるような美声を発する。

真姫 「ああ～～～～」

銀時と神楽も続く。

あああ、あ

真姫 「全然ダメ！腹筋を使つて？頭の上から声が抜けるように！」

銀時と神楽の2人は

あ、あ、あ、あ、う！

森全体が揺れるような衝撃だ。

真姫「ち、ちよつと！バカみたいに大きい声を出せって言つてるん

じやないわよ！」

にこ（銀時）「割とうまくでき

真姫「どこがよ！」

すると突然3人の元に風が吹き込む。

真姫 「ちよ
何? 天気予報ではずっと晴れって...」

地面に大きな影ができる。異変を感じた真姫は上を見上げると

う、ええ！

大きな風は、このドラゴンの翼で起きていたのだ。

絵里（神楽）「にこちゃんこれって・」

にこ（銀時）「どうやら俺たちの大きな声で…」
そのグラゴンは大きな翼をはためかせる。すぐ

3人に吹き込む。

にこ（銀時）「バハムートを目覚めさせてしまつたようだな。」

真姫「バハム・何!」

吐き出す勢いだな。」

真姫「メガフ・何!」

にこ（銀時）「メガフレアたこの辺り一面を焦土化してしまうな」
真姫「ファイナルファンタジー!? どどどどうするのよ！ イヤよ！ 死

にたくない！」

絵里（神楽）「だつたら殺るしかないね！」

真姫「殺るつてどうやつて!?あんな空高く飛んでるのに！」

銀時は身構えると腰に下げていた木刀『洞爺湖』をバハムートに向ける。

にこ（銀時）「届かないなら投げるしかねえだろオオ！」

思いつきりぶん投げる。

ペシツ

あつけなく尻尾で叩き落とされる。

にこ（銀時）「無理でした。」

グルルルル・

バハムートが低い唸り声をあげている。

真姫「えええ?!どうするのよ!なんか怒つてるし···このままじゃ私たちがファイナル迎えるファンタジーよおお!!」

にこ（銀時）「だいぶ混乱してるようだな···」

絵里（神楽）「私にまかせるよろし！」

そう言うと神楽は木に駆け上がり飛び上がって日傘の先端をバハムートに向ける。

絵里（神楽）「くたばるネエエ!!」

傘の先端からマシンガンのように銃弾が発射される。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ!

ブオオオ！

しかし、バハムートは体をひるがえし全てかわした。

絵里（神楽）「無理だつたアル。」

真姫「ちよつとオオ!!」

するとバハムートが大きく息を吸い込む。

にこ（銀時）「あ、これ絶対ヤバイやつだ。」

真姫「メガフレア···」

にこ（銀時）「真姫、今から言うことをよく聞け。」

真姫 「な、なに？」

真姫は恐怖に震えている。

にこ（銀時）「真姫の歌声は透き通った天使の美声だ。」

真姫 「なによ急に・べ、別に悪い気はしないけど・」

にこ（銀時）「俺たちがヤツを引きつける。真姫は歌を歌ってくれ。」

真姫 「な、なんですよ！こんな時に・できるわけないわよ・」

にこ（銀時）「真姫の歌声がバハムートをおとなしくさせるはずだ。」

真姫 「・そんなの無理よ。」

にこ（銀時）「そういう設定のはずだ。」

真姫 「そういう設定てなによ・無理よ・怖い・」

真姫はまだ震えている。すると銀時が真姫の正面に立ち、両肩を優しく触れる。

にこ（銀時）「大丈夫。真姫ならできる。俺たちを信じてくれ。」

真姫を見つめる銀時。

真姫 「にこちゃん・」

そして銀時は振り返ると神楽に指示を出す。

にこ（銀時）「神楽・絵里！バハムートを挑発して凹になつてくれ。俺が後ろから一撃食らわせて動きを止める！」

絵里（神楽）「銀ちゃん・」

神楽は決心したような顔で銀時に近づく。

絵里（神楽）「もつと手つ取り早い方法を思いついたネ。」

にこ（銀時）「ん？ 神樂ちゃん？」

そう言うと神楽は、銀時の両足をつかむ。

にこ（銀時）「やめて・神楽ちゃん・何する気・ちょ・」

神楽は銀時の両足をつかんだまま回転を始める。そう、ジャイアン

トスティングである。

絵里（神楽）「行くネ――!!」

にこ（銀時）「ぎやああああ！やめろー！とめてー！目が回るー！氣

持ち悪い・」

真姫「絵里がジャイアントスティングしてる。想像するだけで滑稽である。」

30回ほど回転させて勢いがついた次の瞬間、思いつきりバハムートの方にぶん投げた。

うおああああああ！！

いつけえええええ！！

ドゴオオオオン!!

見事にバハムートの頭部に命中。

にこ（銀時）「うつ・」

オボロシヤアアアア!!

さらにバハムートの顔面にゲロをぶちまけた。

グギヤアアアアア!!

バハムートが苦しんでいる。

真姫「にこちゃんが嘔吐・ていうかむしろバハムートの逆鱗に触れたんじゃない？」

絵里（神楽）「今ネ！ 真姫ちゃん！」

真姫はゆっくりと深呼吸する。

スウ・

愛しててるバンザーイここでよかつたら

私たちの今がくここにあるく

愛してるバンザーイ始まつたばかりく

明日もよろしくねくまだくゴールじやなくい♪

すると、バハムートの動きが止まる。

絵里（神楽）「バハムートの動きが止まつたアル！」

にこ（銀時）「・続けてくれ、真姫 うつぶ・気持ち悪い

真姫は再び歌い出す。

笑つてよ悲しいなら吹き飛ばそうよ
笑えたら変わる景色晴れ間がのぞく
不安でも幸せへと繋がる道がく
見えてきたよなう青空く♪

バハムートがすっかりおとなしくなった。

時々、雨が降るけど水がなくちゃ大変♪

乾いちやダメだよ、みんなの夢の木よ育て♪♪

さあ♪

大好きだバンザイ

負けない勇気♪私たちは今を楽しもう♪

大好きだバンザイ

頑張れるから♪昨日に手を振つて♪ほら♪前向いて♪♪

いつの間にか銀時と神楽も自然と歌つていた。

そして・

グググググ

バハムートはゆつぐり翼を広げると

バサバサバサバサ

ゆつくり遠くへ飛び立つて行つた。

真姫「行つちやつた」

真姫は緊張が解けたのか、ふらついて倒れようとする。

にこ（銀時）「真姫！」

すんでのところで真姫を抱き抱える。

真姫「にこ 銀さん」

にこ（真姫）「危ねえところだつた 頑張つたな真姫。」

真姫「銀さん

にこ（銀時）「なんだ？」

真姫「ゲロですつぱ臭いから下ろして。」

にこ（銀時）「」

時は過ぎて夜。小川の近くにテントを張つて焚き火をする3人。

絵里（神楽）「銀ちゃん、もう食べれないアル・zzz」

にこ（銀時）「おい神楽、そんなどこで寝るなよ？」

絵里（神楽）「zzz」

真姫「ふふ、あんなに怪力なのにやつぱり中身は子供なのね。絵里がジャイアントスイングする姿は見ものだつたけど、ふふふ」

にこ（銀時）「このまま寝てりや可愛いんだがな。」

そう言うと銀時は神楽を抱き抱えてテントに寝かせる。すると神樂が突然パッと目を開く。

にこ（銀時）「うお!? 起きてたのかよ!」

絵里（神楽）「銀ちやん、焼き芋2人で食べてしまわないでね。なくなつてたら許さないアル……」

にこ（銀時）「寝るか喋るかどつちかにしろ。安心しろ 取つておくから。」

神楽をテントに寝かせた銀時は焚き火に当たっている真姫の元へ戻る。

真姫「銀さん」

にこ（銀時）「ん？」

真姫「今日は、ありがとう。」

にこ（銀時）「ああ。俺たちも真姫の歌声がなければどうなつてたかわかんねえからな・怖かつたろ? ありがとな。」

真姫「・何よ。にこちやんの顔で真剣に喋らないでよ。」

にこ（銀時）「ほら。」

銀時は真姫に焼きあがつた焼き芋を手渡す。

真姫「熱つ」

にこ（銀時）「悪い・熱かったか。」

真姫はゆつくり焼き芋の皮を剥くとかぶりつく。

真姫「・美味しい。」

にこ（銀時）「お嬢様も焼き芋は食べるんだな。」

真姫「・バカにしないでよ。前もこやつてにこちやんと焼き芋食べたなあつて思つて。」

にこ（銀時）「そうか。みんな無事に帰つて来れたらいいな。」

真姫「そうね・それにしても何者のしわざなのかしら。」

にこ（銀時）「さあな・だが安心しろ。俺たちが守つてやるから。」

真姫「・うん。」

しばらく沈黙する2人。

にこ（銀時）「真姫も寝ていいぞ? 火は俺が見てるから。」

真姫 「・・・
うん。」

すると突然、銀時が真姫に近づく。

にこ（銀時）「真姫。」

驚いて顔を真っ赤にする真姫。

真姫「ななな、何?!」

にこ（銀時）「今オナラしたニコツ?」

真姫「ひつぱたくわよ。」

そして夜は更けていく。

つづく

導かれしバ力たち

チーム『プリン隊』のターン

穂乃果
ん

外を見ると朝日が差し込んでいた。

穂乃果一えり

「…………」穗乃果ちゃんもにや

穂乃果「ことりちゃん！朝だよ！穂乃果たち半日も寝てたよ！」

花陽も起きてぐる

在陽一おはよシ穂万果セヤん
お腹空いたれ

種刀果一そふに言ひは

3人のうち復が

この人のお腹がやのこい音を出で

總乃果
「贊成！」

花陽 「ペコペコだよ！」

3人は別荘に戻った。

穂乃果「ただいまサンジさん！」

サンジ「おかげり。ん、なんか嬢ちゃんたち腹減つてそうだな?」

ことり 「実は・あはは」

サンジ「待つてろ、すぐなんか用意してやつから。」

穂乃果「ありがとうございます！」

リビングの椅子に座る3人。

「ことり」「ねえ、穂乃果ちゃん」

穂乃果「何?」

」とり「こ」のまま絵里ちゃんたち帰つて来れなかつたら・

穂乃果 「そんな怖いこと言わないでよ！きつと大丈夫だよ！」

花陽「 そ う だ よ 、 私 た ち は 私 た ち の で き る 事 を 精 一 杯 や ろ う ? 」

ほどなくしてサンジが料理を運んでくる。

サンジ「サンジさん特製の朝食だ。スープからゆつくり召し上がる

れ。」

わああああ！

フレンチトーストに目玉焼き、野菜たっぷりのコンソメスープがなんとも食欲をそそる美味しい匂いを放っている。

穂乃果「どりあえず今できるのは朝食を食べることだね！」

ことり「穂乃果ちゃんたら…」

花陽「食べよう！」

いただきまーす！

夢中で食べる3人。

サンジ「おいおい、ゆつくり食べないと喉に詰まっちゃうぞ？」

穂乃果「昨日の夜から何も食べてなくて！」

ことり「本当に最高の朝食です！」

花陽「花陽としては・お米も欲しかったなあなんて…」

サンジ「そう言うと思つてほら。」

サンジはおにぎりを持ってきた。

花陽「うわあああさすがです！サンジさん！」

サンジ「クルーの好みや健康状態を知るのもコツクの仕事よ…」

ことり「なんだろう・すごく力がみなぎつてくる！」

穂乃果「すごく元気になるね！」

花陽「それじゃ食べたら少し休憩して練習始めよう！」

・そしてまた昼寝する3人であつた。相変わらずマイペース。

だが、それでいい。

そして、それぞれの3日間を終えて

真姫の別荘にそれぞれのチームが戻つてくる。

ピンポーン

穂乃果「ん？誰だろ…みんな戻つてきたのかな？」

花陽「花陽出てくるね！」

花陽が玄関に走つて行き扉を開けると
「こんにちは。μ'sのみなさん。」

ええええええ!!

玄関で驚く花陽の声を聞きつけて慌てて駆けつける穂乃果とこと
り。

穂乃果「どうしたの花陽ちゃん……ってええええええ!!」

ことり「あつ!」

そこに立っていたのは

ツバサ「こんにちは。穂乃果さん。」

別荘を訪れたのはA—R I S Eの綺羅ツバサだつた。統堂英玲奈、
優木あんじゅの2人も一緒である。

穂乃果「…と、とりあえず中にどうぞ!」

ツバサ「お邪魔するわね。」

リビングに入るA—R I S Eの3人。

ツバサ「あら、他のメンバーはいないのね?」

穂乃果「ああ、みんなそれぞれ特訓・練習してまして!」

花陽「お茶持つてきますね!」

ことり(穂乃果ちゃん、どうしよう 絵里ちゃんたちのこと)

穂乃果(そ、そうだよね)

するとツバサはニコッと笑い穂乃果に話しかける。

ツバサ「大丈夫よ。私たちは実は事情を知ってるの。」

穂乃果たちは驚いた顔をする。

英玲奈「東條さんから事情は聞いている。大変なことになつたな。」

ツバサ「それより銀・矢澤さんはまだ戻つて来ないのかしら?」

お茶を持って戻つて来る花陽。

花陽「お茶どうぞ!みんなもうすぐ戻つてくるかな?」

その時、玄関の扉を開く音がした。

真姫「ただいまー」

海未「ただいま戻りました。」

同じタイミングで6人が戻つてきた。

穂乃果「おつかれりー!」

絵里（神楽）「お腹空いたアル！」

真姫「あなた、ほどんど食べてばっかりなのによく太らないわね」

希（新八）「もう・修行したくない」

凛「なんか悟りを開いた気分にや」

リビングにいるA—R I S Eの3人を見て驚く真姫。

真姫「A—R I S E！どうしてここに？」

後から入ってきた海未が穂乃果に近付き耳打ちする。

海未（穂乃果、絵里たちの事は…）

穂乃果「海未ちゃん、A—R I S Eのみんなも知ってるみたい。」

海未「え…」

ツバサ「こんにちは、Sのみなさん。実は東條さんに全て聞いています。それよりも・矢澤さん。」

後からリビングに入ってきた銀時（見た目はにこ）に話しかける。

にこ（銀時）「・なんだ？」

ツバサはニヤリと笑うと

ツバサ「疲れたでしよう？一緒にお風呂に入りましょう！」

全員「ええええええ!!」

ツバサ「さあほら、一緒にお風呂で愛を・じゃなかつた友情を確かめあいましょう！」

海未「は、破廉恥です！やめてください！にこの中身はどう存知ですかね？」

真姫「そうよ！なんで一緒に入るのがイミワカンナイ！」

ツバサ「あら、私はただ練習で疲れた矢澤さんの背中を流してあげようかと・」

希（新八）「いやいやダメでしょオオ!!事情知ってるってことは中身がオツサンって事も知ってるんだよね!!」

絵里（神楽）「女子高生とオツサンが一緒に風呂とか鳥肌どころか鮫肌ものアル・」

しかし銀時は冷静に言った。

にこ（銀時）「お前、さつちやんだろ？」

ツバサ「ぎくつ！」

希（新八）「今ぎくつて言つた？ぎくつて普通に言う人初めて見たわ
！つてエエ！」

そう、綺羅ツバサは源外のカラクリで変身した猿飛あやめだつた！
ツバサ（あやめ）「さすがね・銀さん。もう少しでお風呂でくんずほ
ぐれつ・」

希（新八）「女子高生たちの前で何言つてんだアア！」

穂乃果「くんずほぐれつて何？ことりちゃん。」

ことり「わかんない（・8・）ちゅん」

海未「破廉恥です！」

絵里（神楽）「ということは、他の2人も変身してるアルか？ロボ子、
お前は誰アルか！」

希（新八）「ロボ子言うな！本人だつたらどうするの！」

絵里（神楽）「だつてアニメでロボみたいな喋り方してたネ。だから
ロボのメスでロボ子アル。」

希（新八）「おいイイイ！失礼にも程があるだろオオ！」

英玲奈「・」

絵里（新八）「ほら・怒つてるよ・謝つて神楽ちゃん。」

すると英玲奈はカツと目を見開きこう言つた。

英玲奈「ロボ子じやない！桂だ！」

にこ（銀時）「なんだ、ヅラか。」

英玲奈（ヅラ）「ヅラじやないロボ子だ・間違えた桂だ！」

希（新八）「つてエエエエエ!!桂さん!!」

穂乃果「すごい！喋り方も本物だよ！」

海「カツラ・ヅラ・なのですか？」

ことり「ふきふさだよね？」

希（新八）「いやいや苗字の話で・あれ？ということは・」

あんじゆは後ろからプラカードを取り出す。そこに書いてあつた
のは・

あんじゆ『完つ全にエリザベス♪』

希（新八）「エリザベス先輩イイイ!!喋れない人変身させたらダメだ
ろオオ！」

あんじゅ「・・・るせえな。ミンチにすつぞ。」

希（新八）「はい、ごめんなさい。」

真姫「何？どういう事？A—R—I—S—Eも全員中身は別つて事？」

海未「そういうことらしいですね。」

凜「完全にカオスだね！」

花陽「どうなつてるの・・・」

すると事のいきさつをゆつくり話し始めるヴラ。

英玲奈（ヴラ）「俺とエリザベスはロンダルキアの洞窟からハーゴンの城を目指していた。」

希（新八）「何の話！？」

英玲奈（ヴラ）「運よくロンダルキアを抜けたのだが、あれ？稻妻の剣取り忘れてね・・・と思い出してまた洞窟に戻り、運悪く落とし穴に落ちて気づけばこの姿に・・・」

希（新八）「なるかアアア！！しかもドラクエ2のネタなんてほとんど誰もわからんねえだろオオ!!」

整理すると、ツバサになつた猿飛あやめ。英玲奈になつた桂小太郎。あんじゅになつたエリザベスの3人だつた。

ツバサ（あやめ）「この姿でここに現れたってことはわかるわよね。」

にこ（銀時）「・・・A—R—I—S—Eの3人も地球の外つて事か。」

ツバサ（あやめ）「そうよ・・・しかもハメツク星。」

希（新八）「・・・もう偶然といふレベルじゃないですね。」

ツバサ（あやめ）「私たち御庭番衆も独自に調査してるわ。ただこれだけは言えるわね・・・」

ツバサは少し沈黙すると言つた。

ツバサ（あやめ）「何者かがライブを中止させようとしている。」

穂乃果「えつ・・・」

ことり「そんな・・・」

全員に衝撃が走る。

つづく

んまい棒は意外とお腹いっぱいになる

穂乃果「誰かが私たちのライブを邪魔しようとしてるってこと?」
ツバサ(あやめ)「現時点で私が知る情報はそのくらいね:何者かつて所までは特定できてないけど…」

海未「どうして…なんのために?」

英玲奈(ヅラ)「噂ではスクールアイドルの市場に目を付けた天人がどんどん参入してきてるらしい。そこで全国のスクールアイドルが集まる今度のライブをつぶして…自分たちの市場を拡げようという魂胆であろう。」

ことり「スクールアイドルはみんなを笑顔にするための存在なのに…ひどいよ…」

真姫「お金のため…ね。」

穂乃果「許せない…」

希(新八)「穂乃果ちゃん?」

穂乃果「許せないよ! ハ, Sだけじゃない、全国のスクールアイドルみんなが一生懸命頑張つて…みんなで作り上げるライブをつぶそうとするなんて…絶対に許せないよ!」
にこ(銀時)「だつたらどうする?」

穂乃果「もちろん、阻止するよ!」

にこ(銀時)「それが命を落とす危険があるとしても…か?」

海未「銀さん、穂乃果は一度言い出したら聞きません。それに…みんなも同じ気持ちです。」

ことり「ことりもライブ絶対やりたい!」

真姫「そうね…そんな人たちのためにライブを中止するなんてイミワカンナイ!」

花陽「ちょっと怖いけど…花陽も許せないです!」

凜「凜もそんな人たちにスクールアイドルを汚されたくないにや

!」

希(新八)「みんな…」

絵里(神楽)「さすがハ, Sアルな!」

にこ（銀時）「決まりだな。そこで俺に考えがある。」

銀時が、Sに出した提案…それは

「ゲリラライブ?!」

にこ（銀時）「そうだ。ゲリラライブを開催して敵をおびき出す。」

希（新八）「そんな…危険すぎますよ！」

絵里（神楽）「そうね！何考えてるアルか！乙女たちに脱糞させたら
とんでもない特殊な性癖の猛者が集まるヨ！」

希（新八）「神楽ちゃん、なんか勘違いしてない？下痢ライブじゃな
いからね？そんなの見せたら謀らずしてスクールアイドル活動でき
なくなるからね？」

にこ（銀時）「ただし、ライブやるのは俺たちと…そこの3人だ。」

英玲奈（ヅラ）「ん？銀時、まさか…」

にこ（銀時）「そのまさかだよ。万事屋、ヅラ、エリザベス、そして
…さつちやんだ。」

一瞬固まる空気。そして…

「マジでかー!!!」

ことり「うわあ面白そう♪」

凜「テンションあがるにやー！」

海未「万事屋さんたちが囮になるということですね…」

穂乃果たちは察したように顔をしかめる。

絵里（神楽）「銀ちゃん、脱糞は無理だからゲロでもいいアルか？」

希（新八）「だからゲリラライブじゃないわア！」

ツバサ（あやめ）「ふふふ…こう見えて私、脱糞は得意なのよ。」

希（新八）「いや、どんな特技だよ。」

英玲奈（ヅラ）「グリダンスなら任せろ。」

希（ヅラ）「そんなダンスないわア！」

あんじゅ（ザベス）「…」

希（新八）「どうしたんですか？エリザベス先輩。」

プラカードを差し出すエリザベス。

あんじゅ『完つ全にゲリライブ』

希（新八）「おい、やめろオ！ハアハア…氣を取り直して…銀さん具体的にどういう作戦ですか？」

にこ（銀時）「まあそれについては後から打ち合わせするとして…とりあえず俺は用事があつから、みんなでメシでも食つてくれ。じゃあな。」

希（新八）「ちょっと銀さん！どこ行くんですか！」

ぐくきゆるるる

突然誰かのお腹が鳴る。

穂乃果「そろいえば戻つてから何も食べてなかつたね…」

海未「もう…緊張感が台無しですよ穂乃果。」

ことり「穂乃果ちゃんらしいね♪」

真姫の別荘に入つて食事をする一行。

サンジ「さあ召し上がり。人数増えたからビュッフェ形式にしてみたぜ。」

テーブルの上には色とりどりな食材を使つたまるでホテルビュッフェのような料理が並んでいる。

「いただきまーす！」

穂乃果 「これ美味しいーー！」

ことり 「サンジさんの食事は絶品だね♪」
サンジ 「ありがとう嬢ちゃんたち。」

絵里（神楽）「こんな美味しいもの初めて食べたアル！んまい棒の盛り合わせ最高ネ！モグモグムシャムシャ…」

希（新八）「神楽ちゃん、んまい棒だけじゃなくてバランスよく食べなきや…それにゆつくり食べないと喉に詰まっちゃうよ？」

絵里（神楽）「ゲロライブに向けて沢山食べとかないと観客席までゲロ飛ばせないアル。」

希（新八）「一旦ゲロから離れろオオ！」

花陽 「えっと…サンジさんもお強いんですね？」

サンジ 「まあな。少なくともルフィの次：位は強いぞ。」

凜 「サンジさん凜たちを守ってくれないかにや？」

真姫 「凜、それはダメよ。」

凜 「どうしてにや？」

真姫 「ここにはコツクとして来てもらってるし、それにこの物語のバランス悪くなるからダメって言われてるの。」

希（新八）「突然リアルな話だな…」

サンジ 「悪いな。この後俺はまたアイツらの所に急いで戻らなきやなんねえしな。」

真姫 「そういう設定なのよ。」

希（新八）「そういう設定とか言うのやめて！それについても銀さんどこに行つたんだろう…」

絵里（神楽）「どうせパチンコでもしに行つたアル。」

希（新八）「だとしたら最低だけど。」

ピンポーン

突然鳴るチャイム。

希（新八）「あ、銀さんかな？ちょっと僕見てきますね。」

しばらくすると…

希（新八）「ええええええええ！」

新八の声が玄関から聞こえる。

絵里（神楽）「どうしたアルか!?」

急いで玄関に向かう一行。するとそこにいたのは…：

理亞「鹿角理亞です。」

聖良「鹿角聖良です。」

理亞「私たち、函館聖泉女子高等学院スクールアイドル」

聖良「姉妹ユニット♪」

理亞・聖良「Saint Snowデス☆」

希（新八）「Aqours飛び越えてSaint Snowの2人が
来たアアア！」

ツバサ（あやめ）「聞いた事あるわ…函館戦争の時に活躍した姉妹の
忍…その悪鬼羅刹のような動きから付いた異名が…函館の白い恋人。
まさかこの2人だつたなんて…」

希（新八）「なんかあの…情報量が多くすぎてどこからツッコんでいい
のかわからんんですけどオオオ！」

理亞「μ,sの危機と聞いて、駆けつけたのよ。私たちスクールア
イドル全体にとつても危機だしね。」

聖良「今日はSaint Snowとしてじゃなく…函館の白い悪
魔として來たわ。」

希（新八）「いや、思いつきり最初Saint Snowつて名乗つ
てましたけど…ていうか白い魔になつてるし。そもそも函館戦

争つて…お2人何歳なんですか！」

理亞「戦争は戦争でも函館ライブチケット争奪戦よ。」

聖良「そこで私達はチケットの転売ヤーとダフ屋を1人残らず抹殺

したんです。」

希（新八）「さらっと怖い事言つたよ？」

理亞「この騒動には少なからずともその転売ヤーたちが絡んでいる

のよ。」

聖良「今やライブチケットにも本人確認が必要になつて、転売ヤーたちもシノギを削られているんですよ。だから悪いやつらと手を組んで一儲け企んでいるわけなんです。」

穂乃果「転売、ダメ！絶対！」

理亞「私と姉様もステージに出るわ。そこで一網打尽よ！」

聖良「函館の白い風船の腕が鳴るわね理亞。」

絵里（新八）「異名変わつてますけど？」

真姫「ところでゲリラライブをどこでやるつもりなのかしら？」

するとSaint Snowの2人の後から銀時が戻ってきた。

にこ（銀時）「かぶき町だよ。もう舞台は整つてるぜ。」

希（新八）「そのために銀さん出かけてたんですね。」

にこ（新八）「いや、パチンコ行つてたわ。」

希（新八）「…」

穂乃果「はじめまして！Saint Snowのお2人もよろしく
お願ひします！」

ことり「お2人の活躍も見てましたよ♪」

海未「姉妹ならではの息のあつたステージ：圧巻ですね。」

花陽「わわつSaint Snowのお2人に会えるなんて！」

凜「テンションあがるにやー！」

真姫「ちなみにSaint Snowが戦闘要員なのも作者都合の
設定よ。」

希（新八）「もう設定の話はしないでエエ！」

聖良「伝説のμ、sさんとお会いできて光榮です。悪を倒して絶対にライブ、成功させましょう。」

理亞「函館の白い彗星の恐ろしさ…思い知らせてやる！」

希（新八）「さつきから異名がブレすぎなんんですけどオ！」

絵里（神楽）「もう食べれないアル…んまい棒1年分は食べたネ…」

希（新八）「神楽ちゃんまだ食べてたの!?」

つづく

昨日の敵は今日もなんやかんやで敵

「かぶき町 万事屋」

神楽 「やっぱり我が家で食べる酔昆布が一番アルな。」

銀時 「我が家つて、ドラ○もんみたいに勝手に押入れに住み着いてるだけじゃねえかよ…」

新八 「疲れましたね、合宿もほとんど野宿だつたし…」

神楽 「それで今からどうするアルか？」

万事屋まで戻ってきた3人は、ひとまず変身をといた。くつろぎながら今後の計画を話していた。

銀時 「この万事屋の前で街頭ゲリラライブをやる。」

新八 「ここで!?」

神楽 「合宿の成果を試す時がついに来たネ！」

新八 「不安しかないんですけど…」

しばらくすると、穂乃果たち6人も万事屋にやつてきた。

穂乃果 「お待たせー！」

た。
穂乃果たち6人は新八の姉、妙に着付けてもらい着物に着替えていた。

新八 「おお！さすが姉上の見立ては完璧です！」
μ s の着物姿なんてレアすぎて…写真撮つてもいいかな？」

神楽 「マジキモイアル。」

新八 「ぐつ…」

μ s の6人は着物が嬉しいのかはしゃいでいる。

ことり 「可愛い着物♪」

凛 「なんかヒラヒラしてて落ち着かないにゃー」

花陽 「普段着慣れてる衣装とは違うからね‥でも可愛い！」

凛 「真姫ちゃんも海未ちゃんも可愛いよ！」

海未 「や、やめてください！恥ずかしいです！」

真姫 「私はお正月とか行事のたびにしようつちゅう着てるわ。別にどうつて事ないわよ。」

穂乃果 「そんな事言つてくノリノリで着替えてたよ真姫ちゃん。」

真姫 「ちょ：穂乃果！」

銀時 「真姫はツンデレのお手本みたいな娘だな。来年の保健体育の教科書に推薦しどこう。」

新八 「ツンデレの授業って誰得なんですか銀さん。」

神楽 「はあゝこんなんだからいつまで経つても新八はムツツリメガネで童貞アルな。」

新八 「誰がムツツリメガネの童貞だアアア！」

銀時 「今やツンデレはファッショニエックだぜ？真姫、ピーコのファッショニエックにでも出演してみる。#ツンデレ真姫でトレンド1位取れるから。」

真姫 「イミワカンナイ。」

新八 「ピーコのファッショニエックでツンデレをアウターみたいにチエツクはしませんよ。」

穂乃果 「あはは！やつぱり万事屋さんは面白いね！」

しばらく他愛もない話で盛り上がる。

銀時 「穂乃果、ちょっとといいか。」

穂乃果 「何？」

すると銀時が真剣な顔で話し始める。

銀時「明日この万事屋の前でゲリラライブを行うわけだが……穂乃果たち6人はここにいる事が敵にバレるとまずい。ひとまず下のババアの店の従業員として溶け込んでくれるか?」

穂乃果は即答する。

穂乃果「なるほど、わかっただ!」

ことり「穂乃果ちゃん理解早っ!」

海未「ことり、多分穂乃果はよくわかつてないのだと思いますよ。」

真姫「下の店つて……いわゆるスナック……よね? スナックお登勢つて

書いてあつたわ。」

花陽「私たち未成年だよ……さすがにちょっと…」

穂乃果「スナックつて何?……お菓子?」

穂乃果は全然把握できていなかつた。

海未「ほらやつぱり。」

新八「えつとその…酒をお客さんのグラスにお酌して、お客様と会話するようなお店…だよ。」

神楽「キヤバクラの昭和版アル。」

新八「言ひ方。」

穂乃果「えー!!んーでも、面白そう!」

ことり「穂乃果ちゃん飲み込み早っ!」

海未「ことり、多分穂乃果は深く考えてないだけだと思いますよ。」

穂乃果「考えてるよー!」

凜「凜もなんか面白そう!」

神楽「こんな可愛い子たちが入つたらキヤサリンはリストラされる

ね。」

新八「いやいやそれはさすがに…あるかも。」

するとその話を盗み聞きしていたキヤサリンが万事屋に入つてき

た。

キヤサリン「おい小娘ども！お前らが今日から入る新入りか？ワタシはお前らの教育係のキヤサリンだ！ビシバシしごくから覚悟しどけよコノヤロウ！」

新八「これ絶対今の話の流れ聞いてたよね？明らかに先輩マウント取りに来てるし。」

すると後ろからもう1人万事屋に入つてくる。

お登勢「おいキヤサリン！何もずっと雇うわけじやないさ。一時的に匿うだけだよ！」

真姫「すごい貫禄のママね。」

銀時「500年生きてる妖怪だからな。妖怪つばかけババアだ。」

神楽「顔にかかると臭そاعアルな。ポリデントしてんアルか？」

お登勢「誰が500年生きてる妖怪だ！それにあたしは入れ歯じやねえし口も臭くないわア！つたく：銀時、大丈夫なのかい？あた

しゃ、なんかあつてもさすがにこれだけの人数は守れないよ。」

銀時「まあそれについては大丈夫だ。たまもいるし……案外ムツつて強いんだぜ？」

穂乃果「穂乃果たちが……強い？」

ことり「お酒は飲めないよ？」

海未「そういう意味ではないと思ひますが。」

新八「どういう意味ですか？」

銀時「言葉どおりの異名さ。たま、頼んだぜ。」

お登勢たちの後ろから、たまも現れる。

たま「銀時様の言葉、理解しました。」

ことり「わあ！すごく可愛い人♪」

新八「人じやなくてカラクリなんだ。実は。」

たま「お褒めに預かり光榮です。ことり様。
ことり「カラクリ? ことりの事知ってるの!?」

たまは穂乃果たちの前に立つ。

たま「μ, sの皆さんのお名前、特徴、身長、体重、スリーサイズ、好きな食べ物、好きなジャンプ漫画…全てインプット済です。」

新八「好きなジャンプ漫画ってなんだよ!? ちなみに、真姫ちゃんの好きなジャンプ漫画は?」

たま「はい。『ついでにとんちんかん』です。」

新八「おいイイイ! いくらなんでも古すぎだろ! むしろこれ読んでくれてる読者すら知らないレベルだぞ!」

神楽「いきなり尻見せたり前見せたりする伝説のギャグ漫画アルな。」

真姫「うええ!? なんで知ってるのよ!?!」

新八「好きなジャンプ漫画合つてたアアア!!」

たま「ちなみに新八様の愛読書はT O L O V Eる…」

新八「言うなアアア!!!」

穂乃果「ちなみに穂乃果は『キン肉マン』。」

新八「いや、歳いくつよ。」

ことり「ことりは『燃えるお兄さん』♪」

新八「これ、作者の趣味だろ。」

海未「私は…『魁!!男塾』です。」

新八「クセ強すぎだろオオ！」

あやめ「私は『いけないルナ先生』よオ！」

あやめも万事屋にやつてきた。

新八「それ月マガアアア!! ジャンプでもないし子供に読ませちゃいけないやつウゥ!!」

銀時「作者はルナ先生読んでモツコリシティハンターってな。」

あやめ「私は銀さんの専属モッコリハンターよ!」

新八「やめてあげて。」

お登勢「そういういえば銀時、源外のやつにカラクリもらつたんだろ?
見せとくれよ。」

銀時「はあ? めんどくせえ…」

お登勢「何だい、この子たちの面倒見させてカラクリも見せてくれ
ないなら今すぐ家賃払つてもらうよ。」

銀時「わかつたわかりましたよ。…つたくめんどくせえな。」

そう言うと銀時は鼻くそを再び付けて矢澤にこに変身した。

キヤサリン「天パのオツサンが美少女に!? 気持ち悪い!」

お登勢「ほう…これがカラクリの力かね。大したものだ。」

たま「さすが源外様の作ったカラクリ。見た目では銀時様と完全に
認識できません。しかし、微量の加齢臭で銀時様とデータ一致しまし
た。」

にこ（銀時）「いや、匂わねえはずだけど? 枕も布団も一生懸命ファ
ブつてるんだけど?」

神楽「この部屋の中がすでにオツサン臭いネ。」

凜「そういういえば…お父さんみたいな匂いするにや…」

花陽「あ…この匂いって銀さんの…」

にこ（銀時）「地味に傷つくんですけどオ!?

お登勢「とりあえず嬢ちゃんたち、下に行こうか。ほらキヤサリン、
たま、行くよ!」

銀時「おいおいイジるだけイジつといてそれだけかい!」

キヤサリン「ワタシの事はお姉様つて呼ぶんだぞ小娘ども!」

たま「私は全自動卵割機、通称たまで結構ですよ。」

穂乃果「全自动卵…何? よろしくお願ひします!」

お登勢たちと穂乃果たちは万事屋を出て万事屋の下のスナックお
登勢へ向かつた。

にこ（銀時）「まったく好き勝手言いやがつて…ところでヅラはまだ来てねえのか？」

新八「そういえばまだ来てませんね。」

あやめ「さつき真選組の屯所あたりをウロウロしてたみたいだけど…」

すると慌てた様子でヅラが万事屋に飛び込んでくる。

桂「銀時！大変だ！」

にこ（銀時）「どうした？真選組にまた追つかれられてるのか？」

桂「その真選組なんだが…何やら様子がおかしいのだ。」

神楽「アイツらの様子がおかしいのはいつもの事ネ。」

桂「違うんだよりーダー、屯所に誰一人おらんのだ。」

新八「どういう事ですか？真選組が不在つて…パトロールとかじやないんですか？」

少し遅れてエリザベスが万事屋に入ってきた。そして、プラカードに貼っている貼り紙を見せる。

『真選組、慰安旅行につき3日ほど留守にします』

……マジでかアアア!!!

新八「いやいやいや、何人かは残つてるでしょさすがに！」

桂「いや、誰一人として屯所に残つていなかつたようだ。」

神楽「この国の警察ガバガバアルな。このまま暴力が支配する世界になつてしまふね。世紀末救世主伝説の始まりヨ！」

新八「いや、始まらないから。しかし全員いないなんて…何かの間違ひじゃないですか？」

桂「間違ひない。屯所に堂々と入つて用を足しても誰も出てこな

かつたからな。」

新八「トイレ行きたかつただけかいイイ！」

にこ（銀時）「まあ、好都合じゃねえか？俺アここでゲリラライブやつてアイツらに邪魔される事も懸念してたわけだが。警察いねえなら…無法地帯だな！」

新八「いやいやいや…まずいでしょー！リアルに無法地帯ですよ！」

…それについては問題ありませんよ。

聞き覚えのある声とともに何者かが万事屋に入ってきた。そこに立っていたのは…

異三郎「いやあお久しぶりですね。みなさん何やら集まつて悪巧みでもしようとしてるのかと思いパトロールに来ました。」

そこに立っていたのは、見廻組の佐々木異三郎、今井信女だつた。

にこ（銀時）「お前らは…見廻組！…どういう事だ？」

異三郎「おや？坂田さんはいないようですね…まあいいでしょ。実は慰安旅行などと腑抜けた真選組に変わり、我々が江戸を預かっているのですよ。ご挨拶も兼ねてお伺いしました。」

にこ（銀時）「大層なこつたな。」

異三郎「…失礼ですがお嬢さん、どこかでお会いしましたか？随分と親しい口調で私に話しかけていますが。」

慌てて新八がにこ（銀時）を奥に連れていく。

新八「銀さん！いつもの口調でしゃべつたらマズイですよ…」
にこ（銀時）「完全に変身してるの忘れてたわ。しかしまさか見廻組とはな…相変わらずいけすかねえ野郎だ。」

新八 「とにかく、にこちゃんの振りでお願いします！」

再び戻る2人。

にこ（銀時）「ごめんなさい！ 加齢臭が親戚のおじさんと似てたから間違えちゃったにこー！」

新八（いやいや余計煽っちゃってるよこの人ー！）

すると何かを察してか、信女がにこ（銀時）に詰め寄る。

信女 「あなた：」

にこ（銀時）「ギクツ（気づかれたか？ やっぱりあふれ出る加齢臭を抑えきれなかつたのかアア！？）」

信女 「サインください。」

にこ（銀時）「へ？」

異三郎「ああ…どこかでお目にかかつたと思ったら、μ、sの矢澤にこさんではないですか。」

新八「なんで知つてんの!?」

神楽「ひよつとしていい歳こいてスクールアイドルオタクの痛いオッサンアルか！」

新八「やめろ。その言い方は一部の読者と作者に効く。」

異三郎「いや、我々別の警護も任されていまして…それがμ、sなのですよ。」

新八「μ、sが警護対象って…」

あやめ「なるほどね。もう警察にもμ、sが何者かに狙われている事が周知されているわけね。」

信女「そう。だからサインください。」

にこ（銀時）「その流れでサインくださいは意味がわかんないんですけどオ!?」

異三郎「信女さんはμ、sの大ファンなんですよ。不躾なお願いで申し訳ないのですが、よろしければサインしてあげてください。」

新八（マズイ…2人が銀さんという事に気づいてないまではよかつたけど、サインなんかしたらバレバレだぞ…ここはうまいこと回避しないや…）

新八「にこちゃん、今日は疲れてるんだよね？すみません佐々木さん、明日でもいいですか？」

にこ（銀時）「はい、背中に書いたにこ！」

新八「つてもう書いてるウ!!」

信女の隊服の背中にデカデカとサインを書いたにこ（銀時）。
その内容は…：

『ポンデリングはじめました☆矢澤にこ』

新八「何書いてんだアアア!!」

信女「…」

新八（マズイよマズイよめっちゃ怪しんでるよ…）

信女「嬉しい。ありがとう。私の好きなポンデリングとのコラボ。」

新八（いや、バレてないんかい!!）

信女「…でも、私がポンデリングが好きってなぜ知ってる？」

新八（ま、マズイ!!）

すると万事屋の奥から…：

絵里（神楽）「はるあああああしょおおおお!!」

新八（おいイイイ!!ややこしくするなアア!!）

信女「…サインください。」

絵里（神楽）「任せるチカラア！」

新八（とりあえず銀さんの氣を逸らせてよかつたけど…つてこれマズイぞ）

絵里（神楽）は、信女の隊服のお腹にサインを書いた。

その内容は…

『賢い可愛い小池百合子☆密です。ミツツです。ミツツマングローブ』

新八「なんで小池都知事だアアア!!しかもエリーチカの要素どこにも見当たらねエエエ!!」

信女「…」

新八（ああ…今度こそ終わりだ…）

信女「…嬉しい。ありがとう。」

新八（バレないのかよオオ!!）

するとこのタイミングでSaint Snowの2人が万事屋にやつてきた。

聖良「あ、サインですね。ちょっと待ってください。」

新八「まだ何も言つてませんけどオ!?」

サラサラっと信女の隊服のお尻の部分にサインを書いた。
その内容は…

#だんすなう☆北の偉大なる指導者マンセー

新八「もうSaint Snowの異名が迷走しすぎて北の偉い人に
なっちゃつてるウウ!!」

異三郎「信女さん、これ以上お邪魔すると悪いですよ。行きましょ
う。」

信女「…家宝にする。」

そう言うと2人は万事屋を出ていった。

新八「はあああ…絶対バレたと思いましたよ…」

理亞 「さすが姉様。」

聖良 「完璧なキヤツチフレーズでしたね。」

にこ （銀時）「なかなか完璧な偽装だつたぞ。」

絵里 （神楽）「あいつらバカでよかつたアルな。」

新八 「バカはお前らだけどな。」

桂 「さて、銀時。作戦を練ろうではないか。」

⋮不安だらけのゲリラライブが明日⋮始まる⋮んだろうか。